「生活に困難を抱える子どもへのソーシャルワーク的支援」認定 NPO 法人キッズドア

注）タイトルについて
ソーシャルワークの定義からすると少し違うのかと思う人もいるかもしれない。しかし、生活に困難を抱える子どもに寄り添い、必要な支援を届けていくことと考え、このタイトルとした。すべての子どもが地域で必要な支援が受けられる第三の居場所の発展を願って。

認定 NPO 法人キッズドア 執行役員　**今井　久子**

【認定 NPO 法人キッズドアについて】https://kidsdoor.net/

2009 年法人設立以来、日本の子どもの貧困課題の解決に取り組んでいる。困窮家庭の小学生～高校生・高校を中退した若者を対象に、無料学習会や、勉強とともに食事等の生活支援も行う居場所型学習会を、東京とその近郊、及び宮城で展開。コロナ禍で困窮する子育て家庭が急増した 2020 年からは「ファミリーサポート」というシステムを作り、ご登録いただいた全国の困窮子育て家庭を対象に、情報支援や食料・文房具支援、保護者への就労支援も行っている。理事長渡辺由美子は、こども家庭庁 こども家庭審議会 貧困対策・ひとり親家庭支援部会臨時委員、厚生労働省 社会保障審議会・生活困窮者自立支援及び生活保護部会委員など、政府委員も務めている。

はじめに

久しぶりに無料学習支援教室へ足を伸ばした。

ボランティア登録に来たと言う、黒ずくめスタイルの彼と出会った。

私に向かって「オレ覚えている？」と。そんなカッコつけてもちゃんとわかるよ「タク」（中学時代のニックネーム）。

彼は、現在は高校を卒業してピザ屋さんへ就職している。「働きに対して給与が見合っていない。」と言っている。この居場所型無料学習会の常連だった生徒。

大きくなったものだと彼を見つめながら「どうしてまた、ここへ戻ってくるのか」と考えた。もっと面白いこともあるだろうにどうしてなのか、そのことを最初に掘り下げてみたい。

1　居場所型学習会とは何か

居場所型無料学習会とは、生活困窮者自立支援法に基づく学習支援事業である。学習支援、居場所支援を通して自己肯定感の向上と高校卒業までをサポートし、社会的な自立を目指す事業である。キッズドアが東京都足立区から 2015 年 10 月に受託し現在まで運営している。

さて、「居場所型」とか「子どもの居場所」など、大人がつくった場所へ喜んでくる子どもたちの実態を見てみよう。先ほどの彼は、中学時代は勉強できない、すぐ人の尻馬にのり友達に利用されやすい、クラスの友達が一人もいない時期もあった生徒だった。そのためか中学時代は皆勤賞といっていいくらい居場所に来ていたし、イベントは何でも参加した。町会自治会の祭りや子供会の行事には、居場所型学習会か

らイベントのコーナーを出して子どもたちが参加したが、ものすごくよく働き、地域の大人からとても褒められ、ニコニコ顔の彼がいた。

●子どもの自信（自己効力感）はどこで形成されるのか

さまざまな逆境のなかにある子どもたちが「自己効力感」を培うには何が必要なのか、キッズドアが大切にする3点を以下、紹介する。

（1）スモールステップの積み重ね学習で少しずつの成功体験を

貧困の連鎖を断ち切るうえで子どもの学力を保障することは極めて重要である。基礎学力の定着や学びなおしのためキッズドアの学習会では、マンツーマンによる学習支援を基本としている。その際に、できないことは戻って学習する。また、現在できることの少しだけ先を伸ばすため小さな成功を褒めて繰り返していく。

（2）ひとり一人が自分で選ぶという実感を大切に

子どもが学習支援など様々な支援を受けるためには、子ども自身が安心・安全だと思う第3の場所が重要である。自分たちが利用する上で安心と感じられるにはどうすれば良いのか、子どもたち自身も考えていることがあるはずだ。そうした子どもたちの意見を取り入れ、大人が用意したものを一方的にあてがうのではなく、自分たちが利用する上で居場所をより良くしていきたいという意見を取り入れて、居場所を運営していくことが効果的である。

その意見を取り入れるための取り組みとして、キッズドアの居場所支援では「居場所総選挙」を実施している。居場所総選挙では、子どもが居場所で「あったらいいな」、「できたらいいな」という意見を投じ、投じられた案をもとに達成したいことを決定して党を結成する。結成した党で選挙期間を経て、子ども全員が投票活動を行って取り組みが決定していく。その一連の取り組みが、子どもの意見を取り入れて自分たちが居場所を良くしていくという気持ち、帰属意識、自分でも何かを変える力があるのだという感覚（自己効力感）を養っていくことにつながる。

（3）価値をみとめ、尊重されることを感じることができる「居場所」での関係性を

子どもたちが居場所学習会に求めることは多様である。学習支援を求める子どももいれば、学習への苦手意識が強くて取り組むことが難しく、学習以外の支援や居場所を求める子どももいる。学習支援を求める子どもと同じ空間の中で学習に集中することが難しい子どもがいると学習に集中して取り組みたい子どもから「あの子はなんで勉強していないのか」、「勉強しないのはダメだ」という言葉をかけられたり、目線を感じてしまったりして、学習に集中することが難しい子どもにとっての心理的安全性が下がってしまう場合がある。

そのようにならないために、キッズドアでは運営に必要なことを子どもと一緒にするようにしている。その中の一つが「食事委員会」である。食事委員会では、学習時間終了後に提供す

る夕食の配膳を手伝ってもらうというものである。この委員会での活動をすることで、学習に苦手意識がある子どもでも学習以外のことに取り組むことができ、運営に必要な役割を担うことで他者へ貢献することにつながる。こうしたことがきっかけで、学習以外のことをしていることが正式に認められ、尊重されることで、居場所でのよい関係性を構築することにもつながる。食事以外にも、常設されている本の貸し出しや美化活動などを行う委員会など、居場所の運営に必要なことを役割としていくことができる。

子どもたちの企画によるボードゲーム

食事委員会

本の整理と美化活動

2　子どもの居場所と不登校支援

昔、学校は教科学習と集団行動を学ぶ場所であり、友人関係から現実的なさまざまなことを学び、様々な関係性の上に自己肯定感が形成される場所であった。戦後の日本が貧しい時代は、学校へ行くことが楽しみだったと語る現在75歳以上の団塊の世代の高齢者。いったいいつから不登校29万人の時代へと変化していったのか。居場所を語るうえでどうしても、学校教育に触れざるを得ないため、このような書き出しとなった。

キッズドアでも3年ほど前から不登校対策事業を開始した。その事業を通しての私の実感であるが、何かあると学校は締め付けを強化して子どもの自主性を奪ってしまう。次に多いのは教師とのトラブルで、ほとんどの生徒は先生が嫌いである。皮肉なことに自己効力感を養うことを目的とした学習でも部活でも行事においても、その子が自信を失う機会はたくさん用意されている。こうして子どもの心が学校から離れてしまう。

つまり、「居場所」ではその反対をやればいいという皮肉なロジックとなる。教育のICT化も大きく進展し、今やバーチャル空間での教育実

践も見られるようになってきた。こうしたなかで、学校がどのようなインセンティブを出そうが、もはや不信感や嫌悪感をいだいた子どもは、無気力となり、向き合いたくない、考えたくないと、学校から別の居場所を求めて逃げて行ってしまうのではないだろうか。

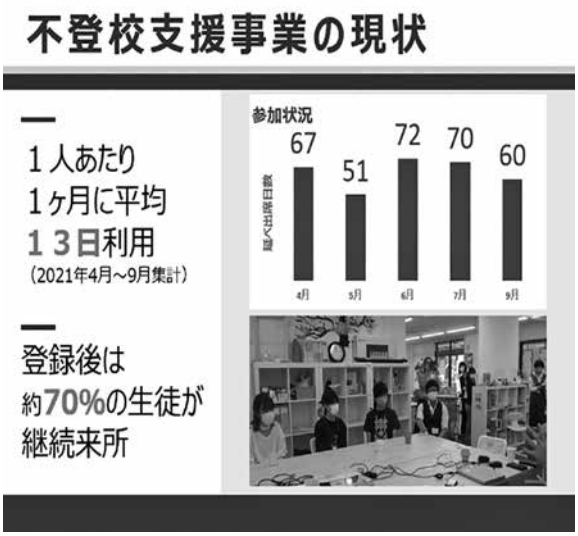
学校を居場所としなくなった子どもは、つながりや帰属意識を一時的に失うことになる。しかし、どんな形であれ、居場所は子どもの成長にとって、いや生きていくうえで必要な要素である。

キッズドアが取り組んでいる地域型不登校支援の子どもの居場所（キッズポート）は、子どもが自分で選びキッズポートに来るところから始まる。

不登校期間が長い生徒がほとんどであるため、まずは、どこに座っていいのか、どこを見ればいいのか身の置き所を探している。必ずと言っていいほど自分の拠り所のアニメキャラクターや本、スマホを持ち込む。

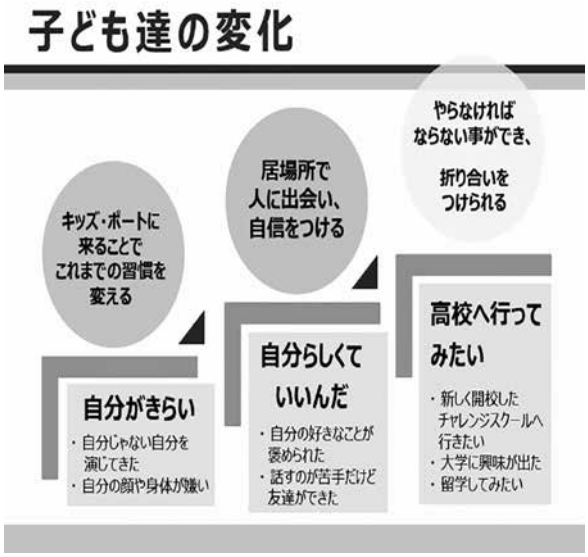
支援スタッフは、初めはマンツーマンで子どもから話を聴く。その子を焦点化して「もっと話をききたいなあ」、決して押しつけない、同じ人間というスタンスで。また、昼夜逆転している生徒も多いため、朝起きる、時間通りに来る、お昼ご飯を食べるといった習慣を作っていく。そして100パーセントがインドア派のため、バドミントン、ドッジボールなど体を動かす目的で外遊びを取り入れた。歩いて近くの公園に行くだけで筋肉痛になった子どもも、バトミントンをやり始めるようになり、友達ができた。他には、キャリアトークイベントやドリームマップなどにより自分自身をゆっくりと自分のペースで省みながら、中学3年の夏休みあたりから、不登校の自分と高校生の自分を思い描き、自分の気持ちに折り合いをつける。

図1　学校が開校している平日（週4日）
1か月平均16日開所



（出所）認定NPO法人キッズドア

図2　子どもたちの段階的変化



（出所）認定NPO法人キッズドア

3　困難を抱える子どもほど体験学習を

「家庭の経済格差と子どもの認知能力・非認知能力格差の関係分析－2.5万人のビッグデータから見えてきたもの－日本財団　2018年」の報告書では、家庭の経済状況は、学力だけでな

く、非認知能力にも影響を与えることが明らかになったと述べている。

いわゆる学力以外の能力（非認知能力）、できることできないことを認識する力、社会的なふるまいによる良好なコミュニケーション、必要な場面で助けを求める力、また、その人の芸術性や表現力の基である五感により相手に伝える力（笑う、頷くなどのノンバーバルな表現）。

キッズドアでは、リアルな体験の場が制限されたコロナ禍においても、体験学習をハイブリッドで取り入れ、子どもたちの成長発達を保障してきた。

オンラインで現地の宮城県雄勝町のモリウミアス（注）とつなぎながら、鮭のさばき方を習う子ども。

鮭の匂い、触感、切るときの音、重さ、そして味わいと五感をフル回転させて取り組む。

解体、焼く、食べるそのひとつ一つを思い起こして振返りシートに記入する。上手くさばくことができたか、鮭の塩焼きができたかという結論は問題ではない。バーチャルな空間でコミュニケーションをとりながら、リアルな作業に取り組む子ども自身が主人公であることが大切なのだ。

（注）モリウミアス：2015年にできた廃校を利用した施設。自然との出会いや共生していく感覚を大人と子供がともに学び合う場。

＊政策用語としては「意図的かどうかを問わず、直接自然や人・社会等とかかわる活動を行うことにより、五感を通じて何かを感じ、学ぶ取組を広く包含」しつつも、「体験を通じて何らかの学習が行われることを目的として、体験する者に対して意図的・計画的に提供される体験」（文部科学省 2013:5）と定義されている。

図３

（出所）認定NPO法人キッズドア

＊「青少年の体験活動の推進に関する調査研究」（文部科学省 2021）本調査研究を通じて、「体験」が充実している子供については、その背景として、父母の収入や学歴が高い傾向にあることも把握された。一般的に、体験の場や機会が提供される度合いには、これら家庭の要因によって格差があるものと考えられる。（文部科学省 2021:23）

また、企業との連携を進め、小さなイベントからキャリア教育やITデザインプログラムなどのPBL（Project Based Leaning）まで多様な体験の機会を提供している。

体験活動・キャリア教育プログラム（2022）
実施回数　262回　参加人数4,470人

4　家庭の経済的要因による学びの格差をなくす

格差是正のために必要なことを国に訴える

「貧困の連鎖を招く一因には、貧困世帯の高校生の大学（高等教育）進学率が低いことが指摘されています。進学・入学準備金への経済的支援は、まだまだ既存の支援が不足しています。」（姉妹団体認定NPO法人キッズドア基金　HPから抜粋）

キッズドアは、経済的困窮家庭の子どもの大学受験を無料学習支援のキッズドア学園高等部、高校生情報室、そしてこの受験生への入学準備金支援等に取り組んできた。そのような折、**2023年10月22日の日曜日の朝**、Yahoo！ニュースに読売新聞オンラインのこのような記事が掲載された。

「こども家庭庁が、所得が一定以下のひとり親や低所得世帯の高校3年生と中学3年生を対象に、大学受験や模擬試験にかかる費用の援助を始めることがわかった。**家庭の経済状況にかかわらず、進学の機会を確保するのが狙い**で、開始は2024年度の見通し。」（太線は筆者）

キッズドアでは、ゴールドマン・サックス支援で「ゴールドマン・サックス大学受験給付型奨学金」として困窮世帯の子どもたちを支援し

てきた。私たちがやってきたことが全く同じ形で国に施策化されたわけである。

奨学金を受けた子どもの声
・大学進学後の支援は充実しつつありますが、受験そのものへの支援は少ないです。受験そのものへ支援をしてくださった皆様には深く感謝しております。
・金銭面で大きな支援を頂けたおかげで、不安も軽減され勉学に励むことが出来ました。
・進路の選択肢が増えるのがすごく有難いです。お金を理由に諦めなくていいのがすごく嬉しいです。
・支援がなければ受験もあきらめたかもしれません。

このニュースのコメント欄には、4,000 件以上の声が掲載されていていたが、ほとんどが自らの現状との比較と経験から批判的なコメントだった。日本はどうしてこんなに子どもに厳しいのかと思う。反対するなら、アメリカから武器を大量購入することに反対するならわかるが、「大学受験料」である。これには、相対的貧困、未だに 8.7 人に一人の子どもが貧困状態にあることが忘れられているのではないか。また、批判的コメントを読むと、日本の子育て家庭、特に中間層が必死に子育てしている様子がうかがえ、教育費にお金がかかり、しかも増税の予兆も感じられる不安定な日本の子育て家庭事情が垣間見られる。

それでも、あなたの知っている生徒が希望する私立大学 1 校しか受験できず、絶対に受かる大学受験を周りからも進められるが、自分自身が納得できないとしたら、一生懸命勉強してきたことにチャレンジしたいと思うのは当然ではないだろうか。

そのため、キッズドアからの受験料支援で 1 校、第一希望の大学には、親にも内緒で高校時代に貯めた大切な 8 万円を受験料に充てて受験したという生徒がいてもよいではないか。普通の家庭なら 2 校 3 校の受験費用は、当たり前に親が出すだろう。たとえ家計が大変でも工面するだろう。この生徒がどんな気持ちで受験したかは、ここで多くを語る必要はないと思う。

困っている子どもへの想像力を働かせていただきたい。

最後に

キッズドアでは、2022 年新しいスローガン「子どもから、未来をひらこう。」とステートメントを発表した。以下、ステートメントの一部を抜粋する。

子どもが本来あるべき姿で、いきいきと育つ日常が今、失われています。
格差や差別、社会システムそのものが、子どもたちにあってはならないほど、ゆがんだ環境を生んでいます。
日本に生きる子どもたちは、大人もしらない生きづらさに悩んでいるのです。
子どもたちに起きているまったなしの問題に、真正面から向き合い「学び」という力をとおして、目の前のその子の未来を一緒に一歩ずつ、つくっていく。
同時に、わたしたちは、社会の新しい仕組みづくりを目指し関わるすべての人とともに、一刻も早い改革を進めます。

「全ての子どもが夢や希望を持てる社会へ」